



Title	書評：「ポップラー文化／ミュージアム」への想像力：丸山泰明『渋谷敬三と今和次郎 博物館的想像力の近代』の実践力
Author(s)	伊藤, 遊
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 179-183
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51392">https://hdl.handle.net/11094/51392</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 書評：「ポピュラー文化／ミュージアム」への想像力： 丸山泰明『渋沢敬三と今和次郎 博物館的想像力の近代』の実践力

伊 藤 遊

### 0 本書の構成

本書は、著者自身のことばを借りれば、「人々の生活を学問的にとらえる独自の方法と成果を築き上げていった渋沢敬三と今和次郎が、ともに設立に関わった民俗博物館の設立とそこでの収集と展示についての取り組みについて論じるもの」である [9-10。以下、表記のない場合は、本書のページ数を示す]。

本書の構成についても著者がまとめているので [17-18]、そのまま引用しておきたい。

はじめに

第1章 民俗博物館とは何か：「渋沢敬三と今和次郎の出会いから始まり、北欧の民俗博物館をモデルとした新しい博物館の創設へと行きつくまでを叙述する。そのうえで、そもそも彼らがモデルにした北欧の民俗博物館とはどういうものなのかを、政治的および視覚文化史的な設立の背景をたどりながら考察する。」

第2章 民具と民家の思想：「[渋沢が自宅に作った民俗博物館のプロトタイプとしての] アチックミュージアムの収集物の形成過程をたどりながら、その特徴について考察する。そして同時代に同じように生活に関するものを対象としながらも異なる価値づけをした柳宗悦の民藝運動と渋沢敬三の民具研究、そして今和次郎の民家研究を比較する。」

第3章 青年団運動と民俗博物館——大日本聯合青年団郷土資料陳列所：「[将来作られる予定だった郷土博物館のいしずえとして] 一九三四年にオープンした大日本聯合青年団郷土資料陳列所を取り上げて検討する。」「この博物館について渋沢と今がどのように関わったのかを明らかにする。」

第4章 紀元二千六百年と民俗博物館——日本民族博物館：「皇紀二千六百年（西暦一九四〇年）を記念する施設の一つとして、文部大臣に設立を建議した日本民族学博物館を取り上げる。」「[結果的には規模が縮小され、当時の日本民族学会附属民族学博物館としてしか実現しなかった] 同博物館をめぐる渋沢敬三の構想と今和次郎がデ

書評:「ポピュラー文化／ミュージアム」への想像力:丸山泰明『洪沢敬三と今和次郎 博物館の想像力の近代』の実践力 (伊藤遊)

ザインした野外博物館について検討し、当初の構想ではどのような博物館だったか、その内容を検討する。」

おわりに:「洪沢と私たちの試みが、戦後、国公立の博物館や文化財保護の制度につながっていったことについて論じ、その上で二人の活動の今日的意義を確認する」

## 1 現代における考現学ブームから

著者自身も書いているように、近年、その仕事を紹介する展覧会や書籍が相次いで世に出たことで、洪沢敬三と今和次郎は、社会的な注目を急速に集めていると言える。特に、今に関しては、「今和次郎 採集講義——考現学の今」(2012年、於・国立民族学博物館)と「路上と観察をめぐる表現史——考現学以後」(2013年、於・広島市現代美術館)という2つの展覧会で大きく取り上げられ、それぞれの図録(青幻舎、2012年／フィルムアート社、2013年)も一般書店で売られることで、あらためてその名を世間に知らしめている。瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』(平凡社、2012年)、『今和次郎と考現学——暮らしの“今”をとらえた<目>と<手>』(河出書房新社、2013年)といった書籍も刊行されたが、展覧会も書籍も、『今和次郎「日本の民家」再訪』を除けば、考現学者としての今に注目したものだと言える。考現学者としての今の相棒であった吉田謙吉に関する書籍(塩沢珠江『父・吉田謙吉と昭和モダン』草思社、2012年)が出版されたのも同じ時期だ。

これだけ大きな考現学ブームは1980年代以来と言っても過言ではないが、80年代においての考現学への関心のあり方は、今回のそれとは異なっているようにみえる。80年代において、考現学は、都市空間におけるマーケティング調査の先駆として、あるいは、無自覚に拡大する都市に対する冷静なまなざしとして再発見された。異なる2つの発想だが、背景には、バブル経済と都市ブーム、ポストモダン的なものごとの考え方の一般化があった。

一方、今回の考現学ブームの背景には、今が関心を持った「日常生活」というものへの、社会一般の素朴な関心があるように思える。80年代がバブル経済期だったのとは対照的と言える近年の慢性的経済不況は、「身近な生活を丁寧に生きる」といった倫理感を産み出している。あるいは再発見されている。女性誌における民藝ブームは、単なる趣味ではなく、生活実践につなげようというムーヴメントにさえなっていると言える。それまで気にもしていなかった「日常生活」の見直しは、3・11という非日常の経験によって加速した。

こうした動きと連動するかのようには、2000年代以降、現代アートの世界でも「日常生活」

はひとつの重要なキーワードになっている[伊藤2006]。「路上と観察をめぐる表現史——考現学以後」展は正にそうした美術界のトレンドをとらえた展覧会でもあっただろう。

本書でも、「生活」と「美(芸術)」を結びつける発想を今の仕事から見出しているが、著者はそれを、考現学調査というヴィジュアル記録の山にではなく、民俗博物館の構想の分析において解説していることが新しい視点だと言える。著者自身も言うように、「これまでの研究では、今の民俗博物館への取り組みとその意義についてはほとんど論じられてこなかった」[13]。その未開拓の対象に注目し、豊富な資料を使って丁寧に読み解いている点に、本書の最も重要な学術的価値がある。

## 2 「ポピュラー文化／ミュージアム」への想像力

もっとも、2006年の開館以来、「京都国際マンガミュージアム」という博物館的機能を持った文化施設で、資料を収集・管理したり展覧会を作ったりしてきた評者にとって、本書がより興味深いのは、著者が国立歴史民俗博物館のリサーチ・アシスタントという職歴を持っていることである。そして、民俗博物館のことを調べるようになったきっかけも、当時進められていた同館の民俗展示のリニューアルプロジェクトに関わる中で、「なぜ博物館が社会に必要なのか、税金を使って運営する意味はどこにあるのかを、根本に立ち返って問い直すべきではないか」「なぜ民俗学博物館は社会に必要なのか」[256]ということを考えるようになったと述べているからである。つまり、本研究は、いま／ここにおけるきわめて実践的な問いを出発点にしたものであり、そうであるならば、本書に描かれる19世紀末から20世紀初頭における北欧の民俗博物館の歴史や渋沢・今らの悪戦苦闘の物語から、私たち読者は、「民俗(と)博物館(の関係)」というものについて考えるヒントを発見する努力をするべきだろう。

そこで、ここでは、「民俗／博物館」の問題系を「ポピュラー文化／ミュージアム」というものを考える糸口として考えることはできないだろうか、という問いを掲げておきたい。

2000年代以降、アカデミズムの中で、マンガやアニメ、ゲームやライトノベルというエンターテインメント文化を学術研究の対象とすることが珍しくなくなっている。一方、平行する形で、これらエンターテインメント文化を(特に対外的な)「コンテンツ」として育てていこうといういわゆる「クールジャパン」政策が進行中だ。両者はもちろん分かちがたい関係にあるとも言えるが、「ポピュラー文化」とも称されるこれらエンターテインメント文化の重要な要素は、大衆的かつ日常的な形で消費されているということである。その意味で、「ポピュラー文化」とは本来、今和次郎が考現学の対象としてきたような意味での生活文化の総体を示していると言える。

「民俗」という日常生活文化を、「博物館」という公的な制度の中でどのように扱うかという問いに対する、本書に登場する人物たちの苦闘は、次のように宣言する現代における「ポピュラー文化ミュージアム」研究の視点と直結しているように見える。「[「ポピュラー文化＋ミュージアム」という、一見相矛盾する言葉を問いの中心とすることは、「ポピュラー」概念の政治学を視野に入れ、文化の序列化やカテゴリー化の力学のなかで配置し再配置される<闘争の現場>として「ポピュラー文化」を考えていくことに他ならない」[石田・村田・山中2013: vi]。

評者は現在、「マンガ／ミュージアム」という「ポピュラー文化／ミュージアム」をめぐる(狭義の)政治に巻き込まれざるを得ない立場にあるが、その状況は、本書で紹介されている民俗文化を公的な文脈で扱おうとする際の民俗学者たちの苦闘とほとんどパラレルなもののように見える。また、戦後の民俗文化財の制度化に関わった宮本馨太郎のエピソードとして、「個々の資料を指定して国の権威で価値づけるのではなく、資料を入れる収蔵庫を設立することのほうをまず目指していた」が、「この考え方は実際の行政のなかではうまく伝わら」なかったため、「[郷に入れば郷に従え]ということをやむをえず指定制度をつくった」という話が本書で紹介されているが[231]、これなども、マンガを公的文化として扱う際の困難と正に重なる話だ。しかし、公的な制度における定義は、文化そのものを固定化させる可能性すらある。また、本書の第4章において、国際社会にあっては、民俗博物館はナショナリズムに直結してしまう可能性を孕んでしまうことを指摘しているが、このことも、グローバル社会を念頭に置いた現在の「クールジャパン」政策をめぐる状況を思い出させる。

そして、言うまでもなく、こうした制度化を(図らずも)保証してしまった／しまうのが、民俗学であり、マンガ研究を含むポピュラー文化研究なのである。学術研究としてマンガを扱うことに反対するマンガ読者は少なくないが、彼ら／彼女らは、こうした可能性に直観的な警戒心を持っているからだろう。

そのような可能性を孕んでいるにもかかわらず、「ポピュラー文化」＝「民俗文化」を公的な制度に乗せていくことには意味があるのだろうか？

もちろん、文化を保存して後世に残す、という意義はあるだろう。しかし、それは、博物館というものを、歴史化された上で一定の価値が認められたモノこそを収集・保存する施設とする、きわめて近代的な発想を前提とする。しかし、価値づけすら拒否するかのよう目まぐるしく疾走し変化し続けているマンガのような“生きている文化”であるポピュラー文化を扱うミュージアムというのは、それまでの一般的な美術館・博物館とはその存在意義が全く異なると言っても過言ではない。

著者が言うように、そもそも「博物館は権力と支配を象徴し、来館者がある特定の思想

書評:「ポピュラー文化／ミュージアム」への想像力:丸山泰明『渋沢敬三と今和次郎 博物館的想像力の近代』の実践力 (伊藤遊)

や価値観へと導く政治的なメディアだが、同時にその収集や展示・研究には、政治性を内側から破っていく契機もまた存在する」。そして、「既成の価値観を揺るがし、自己を他者や未知の世界へと開いていく想像力を来館者に呼び起こしふくらませる場」でもある[16]。しかし、ポピュラー文化ミュージアムが従来の博物館と決定的に異なるのは、そこで意味や意義の変化を意図的に創出することが、そのミュージアムが扱っている当のポピュラー文化、つまり生活そのものの意味を変えたり、作り出したりすることができるからである。例えば、縄文時代に関する展覧会が作られたとして、それがいかに画期的な展示だったとしても、人々の縄文時代に対する見方を変化させることはあっても、当たり前だが、縄文時代の生活そのものを変えることは決してあり得ない。

そのことは、ポピュラー文化を扱うミュージアムに限らず、ポピュラー文化を扱う学問研究にも言える。評者が、渋沢敬三や今和次郎、あるいは柳田國男といった先人たちに感じるのは、そうした可能性を持った「ポピュラー文化研究」に向き合うことの、ある種の「覚悟」である。本書に描かれた「ポピュラー文化研究者」たちと、彼らが構想した民俗博物館＝「ポピュラー文化ミュージアム」にはそのことがことさら強く感じられたのだった。

#### 【参考・引用文献】

- 石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編著『ポピュラー文化ミュージアム——文化の収集・共有・消費』ミネルヴァ書房、2013年
- 伊藤遊「ポピュラーカルチャー＝日常生活を研究する／表現する——考現学における「芸術」と「博物学」」『日本学報』25号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2006年
- 伊藤遊「ポピュラー文化ミュージアムの困難と可能性——“実験場”としての京都国際マンガミュージアム」『歴博』188号、歴史民俗博物館、2015年
- 伊藤遊・谷川竜一・村田麻里子・山中千恵『マンガミュージアムへ行こう』岩波書店、2014年
- 丸山泰明「工夫の力を展示する——今和次郎と民俗博物館」『今和次郎と考現学——暮らしの“今”をとらえた<目>と<手>』河出書房新社、2013年
- 村田麻里子『思想としてのミュージアム——ものと空間のメディア論』人文書院、2014年

(いとう ゆう 京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター・研究員)

(2013年12月刊、青弓社、259頁、定価2000円＋税)